
生徒会の騒乱

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の騒乱

【Nコード】

N2130Z

【作者名】

原石

【あらすじ】

私立碧陽学園。その学校は楽しさと面白さで構成されている。この物語は生徒会室ではなく、ただの帰宅部の少年が放課後や休日に過ごす出来事を綴った物語である。目指せ皆勤賞！！

紹介される龍夜（前書き）

生徒会の一存なのにメインステージは放課後の教室！！

是非読んでみてください！！

紹介される龍夜

松山 龍夜 <まつやま りゅうや>

一人称：俺

年齢：16歳

身長：杉崎より少し低いぐらい

体重：身長相応

性格：基本的に冷静だがツツコむ時はかなり熱い。人を放っておけない優しい性格だが、若干Sっ気がある。

容姿：漆黒で長めの髪。容姿はまともで目はツリ眼。

好き・得意：ツツコミ。リーダーシップ

嫌い・苦手：勉強。ボケ。

宇宙姉弟が幼馴染の碧陽学園に通う高校二年生。在籍クラスはB組。部活に所属しておらず、毎日クラスメートと教室に残って駄弁っている。若干鈍感。足がやけに速く、体力テストの50メートル走では学校内で二位という記録を持っている。

紹介される龍夜（後書き）

「さて、集まったな」

B y 松山龍夜

二年B組の課題（前書き）

「メンドくせえ……」

B y 松山龍夜

二年B組の課題

「ああ——！」

桜が散り、緑に近づいてくる時期の放課後、碧陽学園二年B組の教室に、俺の幼馴染である宇宙巡の叫び声うしゅうめぐりが響き渡った。

どうも。俺は松山龍夜まつやまりゆつやです。巡と同じ二年B組に所属している帰宅部だ。現在一人暮らしで彼女いない歴〃年齢の悲しき少年だ。

「どうしたんだ？ 胸パッドでも落としたのか？」

「つけとらんわ！ そうじゃなくて、今日中に終わらせなくちゃいけないアンケートを忘れてたのよ！ ああ、もう！ クラスメート全員に聞かなきゃいけないのにー！」

「そうか。それは大変だな。じゃあ俺は今からバイトだから」

今日のバイトは世にも有名なセオン・イレブンのレジ係だ。早く行って食費を稼がないとなー。そういえば最近まともな食事をとっていない気がする。コンビ二弁当ばかりの食事は明日でおさらばすつか？

鼻歌を交えながら荷物を纏めて教室を出

——ようとしたら巡に腕をガツシリとホールドされた。

「……………何の用かな、巡さん？」

「今私ね、スツゴク困ってるのよ」

「それはさつきも聞いたんだけどな……………」

「アンケートの内容を全クラスメートに言って、答えを貰って、今日中にまとめないといけないのよ」

「それはお前がその係になっちまったのが原因だろうが」

「うん。それは重々承知してるわ。それでね龍夜。今から私の作業

を手伝いなさい」

「強制かよ！ 自分のミスのせいにくせに！ 俺は今からバイトなんだ！ 貧乏学生嘗めんなよコラ！」

「それはアンタがゲームに財産をつぎ込むからでしょうが！」

「やかましい！ お前らスぺース姉弟に幼いころから振り回され続け、唯一の娯楽は本とゲームなんていう悲しい人生を送ってきた俺の気持ちがお前なんかにかけてたまるか！」

「分からないわよ！ っていうかアンタも十分、私たちを振り回してたわよ！ カブトムシが捕まえたいとか言う理由で富士山の樹海まで引つ張っていったくせに！」

「結局はお前らも楽しんでたからいいじゃねえか！」

「なによ！」

「なんだと！？」

一色触発の空気が俺と巡を中心として二年B組の教室に広がっていく。俺と巡のケンカをいつもとめている、巡の弟の守はまも今日はもう家に帰っている。なんでも通販で頼んだ商品が届くからだとか何とか言ってた気がする。

「まあまあ、落ち着けて。龍夜がおとなしく手伝えれば済む話だろ？ おれはそういうことは穏便に済ます方が良いと思うぜ？」

クラスメートの田之上輝たのつえひかるが俺と巡の間に入って、仲裁した。こいつは守がい不在のときに俺と巡を止められる貴重な人材だ。運動好きでよく運動部に助っ人として頼られる二枚目野郎。かなりモテるし、かなり勉強ができる。神は二物を与えないというがそれは嘘だと俺は思う。

「チッ。わーったよ。今回は輝に免じて、手伝ってやる」

「よっしゃ！ サンキューね、田之上！」

「おう。で、そのアンケートってのはどんなのなんだ？ 答えないといけないんだろ？」

「ええ。質問は一つだけだからすぐに終わるわ。じゃあ、行くわよ」

巡が自分の机の引き出しから一枚の紙を引っ張り出して、コッチに戻ってきた。どうやら結果はケータイのメモ帳にメモするようで、右手にケータイ、左手にアンケートを持っている。

「質問。『好きな人はズバリ？』」

「『製作者を連れて来おおおおおおおおおおおいつ！』」

俺と輝、叫びまくった。しかも心の底からの叫びだった！

俺と輝をキョトンとして見ている巡に向かって、俺たち二人は一気にたたみかける。

「それは質問か！？ 今答えなくちゃいけないのか！？」

「まあ、アンケートだし？」

「それはもはやアンケートの領域じゃない！ かなり悪質な誘導尋問だ！」

「冗談よ、冗談。本当の質問は、『自分の好きなものは？』なの」

「心臓に悪い冗談はやめてくれ……………。おれの好きなものは運動だ。ってこれは言わなくても分かるだろ」

「そうだな。お前って運動バカだもんな」

「黙れ成績クラス最下位」

「人生って、勉強以外にも大切なこと、あると思うんだよ…………」

「逃げてんじゃない」

俺は頭が悪いわけじゃない。勉強が嫌いなだけなんだ。

「じゃあ、次行きましようか」

「へいへい。んじゃまた明日なー。輝う」

「おお。頑張れよー、松山ご夫妻」

「「夫妻じゃない！」」

「というわけで質問に答えやがれ。バードコンビ」

「「誰がバードコンビだ！（バードコンビよ！）」」

俺の言葉に、香坂水鶏こうさかすいけいと如月燕きさらぎつばめの二人が、大袈裟なりアクションをとった。因みに男の方が水鶏で女の方が燕だ。

「うるさいなあ。早く帰りたんだから、早急に答えを求める」

「僕はお前にこの状況の説明を要求してえ！」

「帰り支度。巡に見つかる。俺確保」

「うん。それだけでお前の不遇さが完璧に理解できた。頑張れよ龍夜。僕はお前を心から応援してる」

なんていいやつなんだ水鶏……。俺はお前のその優しさに号泣だよ。

「ねえ巡？ アンケートってすぐ終わるの？」

「ええ。パツと答えてもらえれば十秒もかからないわ」

「それなら良かった。じゃあパツと終わらせましょう！」

「ど、どうしたの、燕？ 何か予定でも入ってるのか？」

「うん。吸血鬼を————ちよつと用事があってね」

「今絶対に吸血鬼って言ったわよねえ！？ これからアンタは一体何をする気なの！？」

「龍夜さん。とりあえず死んでください」

「罵倒！？ お前は相変わらずだな！」

「小鮎は別に悪いことは言っていない。これは人間の主張。いわば権利なのです」

「つざけんな！ そんな権利が存在するか！」

「日本国憲法、第八十七条の第三項に載っていますが？」

「細けえなオイ！ 細かすぎて逆に怪しくないレベルだ！」

「ふう……うふ」

「俺をからかって恍惚な表情浮かべるの、止めてもらえませんかねえ！？」

正直言つて、俺は小鮎が苦手だ。まず口論では勝てないし、そもそも素顔が分からねえ。かなりの美少女なのに、かなりの毒舌。何だこの奇跡のコラボ。

「いいから！ 二人ともパパーッと質問に答えてくれ！」

「そうですか。じゃあ小鮎の好きなものは『龍夜さんの嫌がる顔』で」

「最低だ！ 俺のクラスメイトが今世紀史上、最低なことを言った！」

「まあまあ落ち着け龍夜。アタシはいつでもお前の味方だから」

「さつき小鮎の隣で、メチャクチャ笑ってたやつのはセリフとは思えないんだが」

「アタシの好きなものは『完璧』だ」

「『唐突！？』」

かなり無理やりだが、この二人で二年B組のアンケートはほぼ終了だ。残るは生徒会役員のあの二人だけ。

俺たち二人はお互いの眼を見、頷きあって、生徒会室へ急いだ。

「と、ゆー訳でやってきました生徒会室」
「いえーい。ドンドンパフパフ」
「……状況が読めない!?」「……」

アンケート用紙片手にやけくそなテンションではしゃぎ回る俺と巡を見て、汗を大量に掻きながら驚愕する生徒会の五人。鍵と深夏と知弦先輩以外は喋ったことないけど、まあそれなりにやっていこうと思います。

「鍵。とりあえず俺たち二人の質問に答えてくれ」
「それってどう考えても今日中に終わらせなくちゃいけないアンケートのことだろう! ただ巡が忘れてただけだろう!」
「るっさいわね。しょうがないじゃない。私はアイドルの仕事が忙しいんだから」
「言い訳してんじゃねえよ!? 結局はお前の単純ミスだからな!」
「?」

「深夏、質問に早く答えて。私と龍夜は早く帰りたいのよ」
「話を聞けえ——!」

鍵がいつもの如く、巡に振り回されてる。おもしろいなあ、この二人。

「ナー君。これは一体どういう状況なの?」
「巡の奴に掴まったんすよ。俺は今からバイトなのに」
「そう。………いい気味ね」
「知弦せんぱあい!? ちよっ、今の言葉なんすか!? 俺は聞き

逃さなかったスよ!？」

「ああ、いいわあ……………その驚愕に満ちた表情……………ふう」

「アンタが俺のクラスメートと丸被りするぜちくしょう!」

どうしてこう、碧陽学園の生徒は変わり者が多いのだろうか。因みに知弦先輩が俺のことを『ナー君』と呼んでいる理由は、俺の名前の【龍夜】の夜の部分をピックアップしているからだ。

夜↓ナイト↓ナー君

見たか、この凄まじいほどの安直なネーミングセンス。流石の俺でもビックリだよ!

「そうだなあ。あたしの好きなものは『熱血』だな。目指せ修造先生!」

「目指さんでいい! 今のお前は十分熱いから! 暑苦しいぐらいだから!」

「なんだよつまんねえなあ」

「俺は早く帰りたいんだよ!」

深夏のアнкeートは回収した。これで残るはあと一人。

「鍵の好きなものは『女』ってことで」

「了解。よーっし、これを先生に提出して帰りましょーか」

「待て待て待てえ! 何で俺だけ質問が来ないの!? イジメ反対! 差別反対!」

「「うっさい変態」」

「なんて酷いクラスメートだ!？」

二年B組、アंकeート回収完了。よーっし! これで帰れるぞー!

「とゆーわけで、さよーならー!」
「「「「「再び唐突!」」」」」

私立碧陽学園。

そこは忙しくも、騒がしい生徒たちが、日々を一生懸命過ごしている。

二年B組の課題（後書き）

「そういえば、そろそろ自然合宿があるよな」

B
Y 宇宙守

紹介されるオリキャラたち（前書き）

「頑張つて最後まで読んでくれ！」

B y 田之上輝

紹介されるオリキャラたち

田之上 輝 <たのうえ ひかる>

一人称：おれ

年齢：16歳

身長：杉崎より少し高め

体重：身長相応

性格：かなり純情。そして正直。嘘が苦手。常識は通じる

容姿：黒髪で長さは男子平均並み。イケメンでかなりモテる

好き・得意：運動。コンビニのから揚げ

嫌い・苦手：料理。感動的な話

二年B組の生徒。運動が得意で、よく運動部の助っ人として駆り出されている。ボケは不得意だが、ツツコミはそこそこ。龍夜と巡のケンカを止められる数少ない人材。

如月 燕 <きさらぎ つばめ>

一人称：私

年齢：16歳

身長：深夏と同程度

体重：教えない！

性格：若干天然。勘違いでよく人にときめくが、すぐに勘違いと気づき、自分で訂正する。

容姿：黒髪ショートカットで、頭の右上のほうで髪を結んでいる。かなりの美少女で、人気投票では八位

好き・得意：甘いもの。恋

嫌い・苦手：辛いもの。カオスな話。

二年B組の生徒。よく水鶏と一緒にいて、クラスのみんなからは『バードコンビ』と呼ばれている。恋を追い求める女子高生で、常に出会いを求めている。恋バナをさせると右に出る者はいない。美少女だからかなりモテるのだが、本人が鈍感なので、脈は無し。

香坂 水鷄 <こうさか くいな>

一人称：僕

年齢：16歳

身長：守と同程度

体重：身長相応

性格：碧陽学園の生徒にしては珍しく、常識人。ボケでもツツコミでもない珍しい立ち位置。

容姿：茶髪っぽい黒髪を肩越しに切りそろえていて、ゴーグルを常に頭に装着している美少年。

好き・得意：疑問の解明。ストッパー

嫌い・苦手：魚介類。真儀瑠紗鳥。紅葉知弦。

二年B組の生徒。ゲーム部の部員で、真冬には「くーちゃん先輩」と呼ばれている。燕と二人で『バードコンビ』と呼ばれている。燕とは中学からの同級生で、気がかなり合う。

星空 望 <ほしぞら のぞみ>

一人称：アタシ

年齢：16歳

身長：知弦と同程度

体重：教えるわけがないだろう

性格：クールな姉御肌だが、常識が大きく欠落している。

容姿：黒髪で長めのポニーテール。ツリ目の美人。よく年上にみられる

好き・得意：ほとんど

嫌い・苦手：一般常識

二年B組の生徒。苦手なことがほとんどない完璧超人だが、常識が大きく欠落している。よく小鮎とつるんでいて、二年B組危ない人ランキングで堂々の三位に入っている。

芥子菜 小鮎 <からしな こあゆ>

一人称：小鮎

年齢：16歳

身長：真冬より少し高いくらい

体重：秘密です

性格：かなり礼儀正しいが、毒舌。

容姿：常にダウンナーな表情をしているが、かなりの美少女。明るい茶色の髪を腰のところぐらいまで伸ばしている。

好き・得意：毒舌

嫌い・苦手：無し

二年B組の生徒。生粋の毒舌少女で、龍夜がよくボコボコにされている（精神的に）。望とよく一緒にいて、二年B組の危ない人ランキング堂々の二位を誇っている。

紹介されるオリキャラたち（後書き）

「フッフ……その疲れた表情、いいですね……………ふう」

B y 芥子菜小鮎

二年B組の出発（前書き）

「これが二年B組の真実だったり」

B
Y 松山龍夜

二年B組の出発

『明日の自然合宿って、何が必要だっけ？』

碧陽学園二年生の最初のイベントである自然合宿を目の前にした日の夜、幼馴染である宇宙守から、そんな電話が来た。

因みに、俺は今、ぼーっとバラエティを見ていた。暇だったし、明日の準備は終わってるしな。

「お前、先生の話ぐれえちゃんと聞いとけよ……」

『姉貴に意識を刈り取られてたのにどうやって聞けばいいんですかねえ！？ だから頼む！ この通り！』

「どの通りだ。巡にでも聞けよ。アイツは聞いてたはずだろ？」

『その姉貴が聞いてなかったから、こうして電話してる訳なんだけどな……』

「おい守。そこにいるであろうアイドルに言っとけ。【バーカ】ってな」

『……………』

ん？ 突然、守が黙り込んだ？ 電波が悪かったのかな？

「おい、守うゝ？」

『はい バカの宇宙巡です』

「ぶーっ！」

のどを潤すために飲んでいた麦茶を吹き出した俺を許してほしい。今は予想外だ。まさかのご本人登場だなんて。

「な、なんでお前が電話に出るんだよ！」

『守がいきなり無言になったかと思ったら、私にケータイを渡してきたのよ。それを受け取ったら……いきなりバカ呼ばわりなんてねえ……』

電話の向こうの巡の後ろに修羅が降臨している予感がした。

「……ゴメン兄さん。俺はもう駄目みたいだ」

『アンタには妹じゃないでしょうが。何勝手に架空の存在作り出してんのよ』

「そうだったな。お前なんかよりも百倍可愛い妹がいたな！」

『（メキイ！）わ、私の方が百倍可愛いけどねー』

「ああ？ 何言ってるの？ ついに頭おかしくなった？」

『あ、アンタ明日覚えときなさいよおおおおおおおおおおお
おおおお！（ベキイ！）』

今の音は確実に、守のケータイが握り折られた音だ。何て可哀想なヤツ……あれで何個目だよ。

「まあ、いいか。とりあえず明日も早いし、寝るかー」

ブロロロ……

碧陽学園から数台のバスが出発した。俺はその一番前のバスに乗っている。そのバスは二年B組専用で、俺は後ろの方の席に座っている。

「なあ、輝。今日って何があったわけ？」

俺の右で景色をぼーっと見ていた輝が、俺の問いに顔をこちらに向けた。

「何もないハズだ。おれも良く覚えてないけど、今日は移動だけのハズじゃなかったわけ？」

「移動だけ？ 移動って確か三時間ぐらいだけだったような……」

「どうせ向こうに行ってから、あいさつとか部屋の整理とか、そんなことをやらされるんじゃないの？」

「うえ」

部屋の整理だとか校長の挨拶だとか、そういうイベントが極端に嫌いな俺は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて、通路を挟んで左隣の巡を見る。

「今のは取り様によつては、アンタが私を見て嫌な顔をしたってことになるんだけど」

「もう、それでいいよ」

「はあ、返り血って洗うの、大変なのよねえ」

「暴力反対！ 運転中は座席に座っていきましょう！ く、来るなああああああああああああああああああ！」

「うるさい」

「ぐぶあー！」

巡の容赦無き右ストレートが俺の眉間にクリーンヒットし、俺は輝にもたれ掛かることになってしまった。

「だ、大丈夫か？」

「無理。もう無理。今の攻撃はマジでヤベエ。下手すりゃ死ぬ」
「チッ」

「誰だ！ 今、巡の舌打ちに被せたのはあ！」

「あ。スイマセン。小鮎です」
「そうだと思っただけコンチクショー！」

俺の前の席に座っている芥子菜小鮎が座席の背もたれの上から顔を出して、俺をニヤついた笑顔で見てる。マジでなんなのコイツ。そして、何でここまで知弦先輩にそっくりなの？ 実は兄弟？

「コラコラ。駄目じゃないか小鮎。あまり龍夜を虐めては駄目だぞ？ それは、巡の仕事だからな」

「あ、そうでしたね。スイマセン、サンドバック」

「誰がサンドバックだ！ それは鍵だろうが！」

「はいそこちよつとこつち来ようか」

俺の左後ろの座席で、鍵が額にビキリと青筋を浮かべて、俺を睨みつけてきた。

「なんだよ………エサ」

「エサじゃない！ 何だよその呼び名！ 全く嬉しくないんですがっ！」

「うるせえなあ……深夏、ちよつとソイツ黙らせろ」
「おうよ！」

「嫌だからそれはおかし『せやあ！』げぶはあ！」

深夏の渾身のエルボーが心臓の部分にクリーンヒットした鍵は、大量の泡を吹きながらその場に崩れ落ちた。

そんな鍵を窓際に寄せて、深夏は通路側に移動する。

「なあ、龍夜。三時間って流石に暇じゃね？」

「そうだが、何もすることがねえ訳だし、待つしかねえんじゃないの？」

「えー。あたしは待つこととあたしより貧弱な野郎が一番嫌いなのにー」

「後者はこの世のすべての人間だろうな」

そして下手すれば全生物だろうな。地中史上最強の生物である深夏に勝てる奴なんているわけがない。

「そんなことねえよ。多分だけど関東ぐらいにはいるはずなんだ！片手で海を割るやつとか、声だけで国を滅ぼせるやつとか！」

「うん。そんな奴がいたら、日本なんてとつくの昔に滅んでると思うけどな」

「だって超能力者がこんなに身近にいるんだぜ？」

「微妙なレベルだけどな」

「そこお！聞こえてんだよ！」

巡の隣でケータイを弄り続けていた守が、不意にこっちを鬼の形相で見してきた。何だなんだ？今日はみんな一段とキレてますね。何かあったのか？

「なんだよ、低能力者」

「オレをどっかの学園都市の能力者みたいに呼ぶのは止めてくれませんかねえ！しかもレベル1かよ！」

「当たり前だ。お前の能力なんて、女の勘にも劣る」

「比べる対象がおかしいだろ！」

「じゃあ、あれだ。お前の能力は、アメリカで大ブレイクした超能力ドラマの主人公たちに軽く劣る」

「『HORES』かよ！　っていうか、あのレベルはフィクションだからできるんだっての！　過去に行くとか、高いところから落ちても死なないとか、現実じゃあ無理なんだよ！」

「チツ。なんだよ使えねえ」

「オレの能力をフルに発動して、お前を最悪のバッドエンドに送りたい！」

守は相変わらず元気だなあ。俺の後ろに座っているバードコンビなんて、仲良く頭をくつつけながら寝てるって言うのに。

「守と話してると思わせながら、燕たちの写真を撮るの止めなさいよ……」

「ヤダね。この写真を使って、水鶏の焦った顔を見るんだ」

「子供か」

「子供ですけど何か？」

「いや、そこは否定しろよ……」

「じゃあ、なんだ？　輝はもう大人だから、例のビデオを見る必要はないってか？　あー、残念だったなー。じゃあ、このビデオは俺と守と水鶏の三人で見ることにするよ。お前はその隣でぐっすりと寝れば？　大人らしく就寝時間を守ってさ」

「おれが悪かったです。おれはまだ未熟な子供です。だからそのビデオは四人で見よう！　龍夜さま！」

「分かりやあいなんだよ。分かりやあ」

フツ、ちよろい。このクラスのメンバーを操ることなんて、俺にとつては造作もねえことだ。守の超能力すらはるかに凌ぐ、このチ

カラ。そう！名付けるなら、【ギアス】だ！

「くつくつく、松山龍夜の名において命じる、【バカアイドルはおとなしく寝てろ】と……」

「アイドルパンチ」

「ぐぶるわぁ！」

再び巡の右ストレートが俺の眉間に吸い込まれていった。俺の残りHP、13。

「なんだ？ 今、龍夜の中に真冬が見えたぞ？」

「巡！ いきなり何しやる！」

「よくそんなトチ狂ったセリフが堂々と吐けるわねえ！？ アンタの記憶力はアリ以下か！」

「誰がアリだ！ RPGの中盤でレギュラーから落とされるような性格の奴に言われたくねえ！」

「んなわけないでしょ！？ 私は普通に魔王を片手でひねりつぶせるぐらいのレベルよ！ 完ストよ！」

「黙れ！ お前なんかぁ、アリの大群を見つけたってゆー理由で、バンバン地面を踏み鳴らす子供ぐらい憐れなんだよ！」

「そこまで言う！？」

巡がかなりショックを受けて、「うう……守、席替わつて。景色が見たい……」と言って、守と席をチェンジしていた。今日は脱落者が多いな。っていうか、もう2時間たったのか。早えなぁ。意外と、時間ってすぐに経過するもんなんだなぁ。

「で、今まだ起きてるのって誰？」

「あたしだ！」

「オレも！」

「アタシもだな」

「小鮎もです」

「おれも」

「俺を合わせて6人か……しりとりでやる？」

「賛成だ。フツ、アタシの完璧な脳内著倉庫に、勝てるかな？」

「なんだそりゃ。えっと、パスは無しで、使える単語は名詞だけだ。」

技名とかも禁止」

「ええー！ 何だよ！」

「キリがねえからだ！ どれが本物でどれがニセモンか、分からねえしなあ！」

「ちえ、いいよ、いいよ！ それじゃあ、名詞だけでやってやるよ」

!

「始めからそう言ってるだろうが！ 順番は返事をした順な。じゃあ、スタート！」

深夏「しりとりの『り』！」

守「えっと、りす！」

望「
」スマイル
だ」

小鮎「『ルイボスティー』です」

輝「え？今のってどう続ければいいんだ？」

「はいアウト！」

[illegible]

うるさっ！　右隣で大声響かせやがったから、鼓膜が果てしなく痛い！　っていうか、アウトに対して何で反論？　意味分かんねえ。

「なんだよ輝。今のは完全にアウトじゃねえか」

「いやいやいや、今のはあからさまにおかしいだろ！ おれは質問しただけなんだけど！」

「質問したら答えが返ってくる。ハハッ、世の中そんなに甘くねえよ！」

「やかましいよ！ 今のしりとりとその常識は通用してねえだろうが！」

「どっかの第二位みてえだな。その言い訳」

「やかましいわあああああああああああああああああああああ
！」

とりあえず輝をアウトにしたまましりとりを続行しよう。隣で暗い影を落としながら、「おれって、いつもこんなんばかりだ……」とか「望もおれのことほとんど相手にしてくれねえし……」とかゆー自虐が聞こえるが、俺はあえて無視しますッ！

「じゃあ俺から行くぞー。『ワニ』」

深夏「『に』か……『ニシキゴイ』！」

守「げ。『い』かよー……『いろり』！」

望「『龍夜』だ」

『テンション下がるわっ！』

俺と望以外の二年B組の声が見事に調和した。

「おかしいだろっ！ 何で俺の名前が出たぐれえでテンションが下がるんだよ！ しかも寝てたやつも起きるのかよ！ その悪口言うためだけに起きるのかよ！ 意味分かんねえよ！」

俺の必死のツツコミに、クラスメートたちは一度顔を見合わせて、

『人生、満喫してんなあ』

「やかましいわ！」

俺はクラスメイトに恵まれていると心から思った。

二年B組の出発（後書き）

「フッ。男と言ったら、アレしかないだろう?」

B
Y 杉崎 鍵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2130z/>

生徒会の騒乱

2011年12月10日19時52分発行